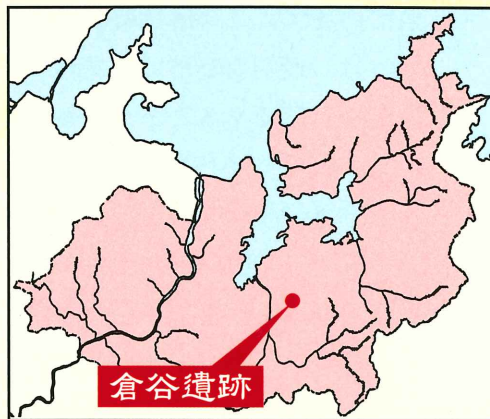


くらたにいせき
倉谷遺跡

場所：舞鶴市字倉谷



舞鶴西地区から若狭へ向かう街道は、南北の山に挟まれた地形を九杵橋から現在の府道白鳥線を東に進み、北に広がる倉谷の集落の中を抜け、その後南の山際を縫うように走り、白鳥峠へ進みます。府道白鳥線沿いの福来工業団地へ上がる交差点から西側には飛鳥時代から平安時代の集落跡である倉谷遺跡が広がっています。

これまで行われた3回の発掘調査によると飛鳥時代から平安時代にかけての竪穴式住居跡が2棟、掘立柱建物跡が19棟と建物の変遷を追うように確認されています。竪穴式住居は家の奥側に竈を造りつけるもので建物は南から広がる扇状地の地形に合わせて建っています。7世紀後半には新しい住居様式の掘立柱建物跡が建物の方向を合わせています。これは、竪穴式住居から掘立柱建物への建物の変遷がこの時期に行われたことを示しており、掘立柱建物が棟の方向や筋を合わせるの是一般集落には見られないことで、整然と並んだ建物群は有力な豪族、もしくは役所の機関である官衙の建物であった可能性を示しています。



第1次調査

平安時代前半には、ほぼ東西方向に走る直線的な幅4m、深さ1.5mの溝が掘られています。この溝は扇状地を横切るかたちで掘られた人工的な溝です。その北側には一般的な集落では見られない庇を持つ建物が建ち、この地域においても中心的な集落であることが分かってきました。溝は出土遺物から奈良時代末の8世紀末から平安時代後半の11世紀代まで機能していたと考えられ、出土遺物の量から9世紀後半から10世紀に集落の全盛期があったようです。中には緑色の釉薬が掛かった緑釉陶器や須恵器の硯が見つかっています。緑釉陶器は京都の都で珍重されていた器で、その中には筆を置く耳杯と呼ばれるものがあります。硯があることは、都の生活を体験し、この地で字を書く必要があったことを示しており、奈良時代から続く有力豪族もしくは公的な機能を持つ集落で舞鶴西地区の大内地区の中心として栄えた集落跡と考えられます。この地は文献に寿永3年(1184)に平辰清が大内郷を八条院女房の弁局に土地を寄進したことが記されており、奈良時代から平安時代にわたる文献に現れる以前のこの地の様子を示す重要な遺跡と考えられています。



第2次調査



第3次調査